藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第120次）

大和三山に抱かれた藤原宮内で、4月末から発掘調査を本格的に実施しています。調査地は政務や儀式、饗宴の場であった朝堂院地区の東側にあたります。朝堂院東第二堂と呼ばれる建物の北半部と、朝堂院を構成する東面回廊の構造を検証するのが、今回の調査の主な目的です。実は、藤原宮は古文化研究所によって戦前に発掘されています。しかしそれは部分的な発掘にとどまったため、建物構造の詳細は不明なままでした。また、近年の調査成果に照らし合わせるとき、古文化研究所の見解には再検討を要する点がいくつかあります。

今回の調査面積は約1100㎡。機械掘削ののち、西から東へ向けて調査を開始しました。スコップを入れ、土をけずると、東西、南北にのびる無数の溝が現れてきます。調査員の間で「ミゾミゾ」と呼んでいる中世以降の耕作溝です。遺構カードに図面を記録し、掘り下げていきました。この作業を一カ月近く繰り返し、ようやく調査区の東端にたどりついたところです。

発掘状況を振り返ってみると、瓦がたいへん多く出土したという実感を強くもちます。瓦葺きの建物があったことは間違いないでしょう。建物の柱を支える礎石は失われていましたが、礎石を据えるための根固めの石は、わずかですが顔をだしています。そのほか建物の存在を示す痕跡も確認しています。しかし詳細はこれからの折り返し調査にかかっており、担当者は気合いを入れ直しているところです。

耕作溝と東第二堂の礎石根石（北から）

山田道の調査（飛鳥藤原第121次）

橿原神宮東口から雷の交差点、飛鳥資料館前を通り桜井市へと延びる県道の改良工事にともなう発掘調査です。この工事にともなう調査は、1988年度以来、今回で9次目になります。今回の調査地は、農免道路との交差点から西へ約20～80ｍの間にあり、県道の北側に位置します。

小規模なトレンチを計4カ所設定し、西端のⅠ区から着手しました。Ⅰ区はおよそ13ｍ四方の広さがあります。地表面から1.5ｍほど下がったところで、調査区全体に粘土の堆積土が広がり、西南隅にほんの少し当時の地表面がのぞくだけで、山田道に関わる遺構はⅠ区では発見できませんでした。

古墳～飛鳥時代の遺物が多く含まれている粘土層は、当時ここが沼地であったことをうかがわせます。さらにこれを掘り下げたところ、深さは地表面から3ｍ近くとなり、底部に到達したところで弥生時代の流路1条を確認しました。この流路からは土器片や完形の壺1個体が出土し、付近に集落があることを示しています。

山田道関連の遺構検出を期待しつつ、順次、東へと調査区を移す予定です。（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

弥生時代の流路（北から）